

市民会館ワークショップ 実施結果（各班発表の概要）

○第4回（1月11日実施）

◎議論：これまでの議論経過を踏まえた「新・市民会館」のあるべき姿について

- 1班
- ・市民が幸せになる施設。
 - ・人が表現する、人と人とのかかわりがある芸術はなくしてはならない。見せる場、言葉を超えて伝わるようなものができればよい。
 - ・市民がより使いやすく、かかわりやすい場が必要。
 - ・市民が立ち上げる・プロデュースするものを作ることで、そこにいる人々の交流を育む。
 - ・様々な団体の個別の活動だけではなく、それぞれをつなげていくような仕組みが必要。
 - ・世代を超えて、若者でも利用しやすい居場所であるべき。
 - ・文化芸術をつながりとして、様々な世代や立場の市民の交流を育んでいく必要がある。
 - ・施設を中心に「高めあう交流」ができる場であるべき。
 - ・様々な背景を持つ市民の交流により新しい文化・社会・価値観などを、ポジティブな交流により刷新していくことができるとうよい。その中心施設とあるべき。
- 2班
- ・コンセプトキーワードとして「魁」「稀」「OPEN」
 - ・市民参加が必要。
 - ・再生可能エネルギーの活用、屋上緑化等、環境への配慮。
 - ・バリアフリー化は必須。
 - ・国籍・年齢・障がいの有無を問わず、皆が集まりやすい施設。
 - ・説明会等を通じて周辺の地域住民との相互理解を進める必要がある。
 - ・一体型の建物として整備し、周囲はオープンなスペースとして確保する。
 - ・オペラを中心とした洋文化の大ホール、和の伝統文化に対応できる小ホールとするなど、ホールごとに特徴を持たせる。その上で、様々な用途にも対応できるよう、最先端の技術を導入する。
 - ・運営スタッフの充実。
 - ・運営において市民が参加できる情報の発信による市民参加の実現。
 - ・施設各室等の遮音性に留意する必要がある。

- 3班 ・現在の効率性と経済性を優先するのではなく、未来の社会の変化を考え、新しい視点と新しい文化をもった場。
- ・子どもたちがすぐれた文化芸術に触れ、豊かな創造性を育む場。
 - ・鑑賞だけでなく、だれでも文化交流できる場。
 - ・ホールは特定のものに特化するのではなく、包容力をもって多様性を大切にしたもの。いろいろな文化を楽しめるものに。
 - ・大きなホールだけでなく、誰もが自由に使えるスタジオ、アトリエ、実験劇場など、多目的に使える場所が必要。
 - ・施設機能として、市民自治文化を育てるための講演会や学習会を自由に開ける、生涯学習機能をもった諸室が必要。
 - ・みんなの宝箱を作って、市民の宝を集めてみんなで見ると、例えば博物館のようなものも必要ではないか。

★★★ 意見まとめ ★★★

◎これまでの議論経過を踏まえた「新・市民会館」のあるべき姿について

- ・国籍・年齢・障がいの有無などにかかわらず、だれもが集い、文化芸術に触れることができ、また利用できる施設であるべき。
- ・ホール機能については今後においてもさらなる議論が必要である。
- ・講演会や学習会を行える諸室、スタジオ、アトリエ等、だれもが利用できる施設や博物館のような機能が必要。
- ・市民参加による運営を行い、様々な人々・分野の垣根を超えた交流を育み、お互いを高めあうことができるような施設となるべき。
- ・複合施設として一体型の建物を整備し、周囲はオープンなスペースとして多目的に使用できるようにすべき。
- ・市民が気軽に文化や美術などを鑑賞できるような施設を併設すべき。